

心が育つということ その(4)

幼児の持つ「内―外」意識の変容をめぐって

豊田 一秀

コントロール感を持つということ

(1)はじめに

自分が何かをしようと「思い」、その思いに沿って行為するということは、子どもにとって大きな意味を、その背後に秘めている。子どもは、自分がしようと思った事に沿って行為した結果、思い通りになった、その変化を見ることによって、その対象に対するコントロール感を得るのである。

例えば、器に水を入れようと思い、水の中に器を入れると、思い通りに水がその中に入って来る。木の切れ端

を水に浮かべようと思い、水に入れると、思い通りに浮く。これらは、一見なんでもないような事のように思えるが、もし、器の代わりにザルに水を入れようと思っても、思い通りにはならなかったであろうし、石を舟に見立てて水に浮かべたとしても、その舟は意に反して沈んでしまい、それらのモノに対するコントロール感は得られなかったであろう。

似た例をもう一つあげてみよう。二歳の子どもが、私の所に来て困ったと言う。聞いてみると、パイプ（喫煙用）の絵を描こうと思うのだが、どうしてもうまく描けないのだそうだ。私はどういう訳なのか、その子の絵を

描くところに行ってみる。その子は画用紙に横線を引くと、「ここまでではうまくいくんだよ」と言う。そして、続いて筆を紙から直線に、空間上に持ち上げると、「ほうら、曲がった所からは、どうしてもかけないでしょう!」と、困った顔をして言う。この、ほほ笑ましい光景の中で、この子どもは、思ったように描けないという事実を通して、自分の「思い方」が間違っていたという事実直面している。

これらの例が示すように、思った通りに事実がはこんだにしろ、また、はこばなかったにしろ、いずれにしても、「思い」の通りに行った結果である、その対象の變化によって、子どもは自己の思い方(意志)について検証し、認識させられざるを得ない。

この事に関して、佐伯(一九八二)は次のように語っている。「私たちが、ものごとの〈理由〉や〈原因〉を探らないではいられないのは、〈どう意志すれば〉モノは予定通り、意志通りに動き、〈意志通り〉の変化をみせてくれるかを知りたいからである。―中略―従って

〈存在するもの〉は必然的に整合性 (coherent) がある。」そして「神よ、変えることの出来ない事を受け入れる心の平静さと、変えるべき事を変える勇氣を与えたまえ。さらに、前者と後者を明確に区別できる分別とを」というラインホルド・ニーバー (Reinhold Niebuhr) の味わい深い言葉を以て、その章を閉じている。

思い通りになったということは、一つの法則といったような物事の「理」に、子どもが従ったという事を意味し(言い方を変えれば、正しく思ったということ)また、外界に対してコントロール感を持つとは、意志の整合性を子どもが持った結果であるとも可能である。子どもは、コントロール感を持ち得た対象を「内」なる存在として感じ、それに慣れ親しむ。そしてこれが、子どもの自己存在感へと結びついていくのである。

自らの意志の持ち方を調整することによって、子どもがコントロール感を持つという事について、これまで述べてきた。このコントロール感は、水は

器に納まり、木は水に浮くといったような自然の法則や、どうすれば虫を捕えられるか、どの虫は刺すか、といったような生物界の秩序などの、外界に対するものだけではない。社会生活を送るなかで、どうすることが友達を喜ばせ、どうすることが、友達を悲しませるかというような対社会的なコントロール感や、さらには、どうすれば自分の怒りを収められるのか、どう思えば、ある人に対する憎しみを和らげられるのか、といったような自分自身に対するコントロールに対してまで、子どもは少しずつ身に付けていくことを志向している。

対モノ的（自然的、物質的）、対社会的、そして対自己的なコントロール感を得ようとすることは、単に幼い人のみの問題ではない。それは、全ての人間が生きていくに当たって、模索し続けなくてはならない長い道でもある。

むしろ逆に、この人生の課題は、幼児期からすでに始まっていると言わなければならない。ここでは、私

感を得ようとしている子どもの姿と、それに対する他者の援助について省察を加えてみたい。

(2) コントロール感を持ちやすい対象の順位性について

保育の場合は、大きく分けて三つの要素から成り立っている。それらは、教師、子ども、モノ（園舎、園庭、遊具、自然物など）の三要素である。

入園当初、泣きながら教師に抱かれている子どもや、入園以前からの友達にすぎる子どもはよくみられる。しかし、第一ステップとも言うべき、それらの時を過ごしたあと、初めて身を置いた環境の中で、子どもが自らの心を動かされ、自分で選びとって行動するその対象は、多くの場合、遊具や玩具、そして中でも、水や砂といった自然物であることが多い。教師は、その環境全体を整えているのであるから、教師の存在はもちろん大きいものであるが、直接、子どもの心を最初にゆり動かすものが、教師や友達といった「人間」ではなくて、「モノ」（飼育されている動植物も含めて）である場合が多いの

は、一体なぜであろうか。本項においては、子どもの持つコントロール感という面から、対人間的、対モノ的なコントロールの違いについて考察してみたい。

幼い子どもにとって、最も近い他者は、母親であるのが一般的であろう。母親は、特に乳児に対しては、しつけをしようとするよりは、その乳児が、快適に、安心して過ごせるように配慮する。そこに、乳児に応えようとする母親の姿が生まれる。乳児の泣き声一つから、様々な乳児の訴えや状態を知り、応えようと、母親は自分の持つ全ての感覚を幼児に向ける。

この関係の中で、乳児は母親に対し、自分の気持ちを察し、援助してくれる存在であると認知し始める。すなわち、乳児は母親に対するコントロール感を持ち始めると言ってもよいであろう。

一方、モノの世界の法則は、常に一貫していて、乳児だからといって、その主張（特性）を緩めるものではない。大事なオシャブリも、ベッドから落とせば下に落ちてしまい、いくら泣いてたのんでも、それが二度とベッ

ドに戻って来てくれる事はない。しかし半面、乳児が一度オシャブリを下に落とそうと思えば、それは常に思い通りに下に落ちてくれる。そして、泣くと母親が来てくれて、それを拾ってくれるという訳である。

このようにモノは一貫した法則を持ち、子どもはそれに従わなくてはならない半面、モノはいつでも子どもを待っている存在であって、けっして押しつけがましく子どもの方に迫って来ない。一定の「理」の通りに思えばいくらでも、子どもはモノを従わせる事が出来る。子どもが、くり返し、くり返し水や土に向かうのは、その活動の中で、自分の思いを試し、思い通りになった結果をくり返してみることで、自分の思い（存在）を確認しているからではないだろうか。

この事に関してランゲフェルド（一九五六）は以下のように述べている。「木によじ登るのは、木が招くからであり、石や岩に登るのもそうである。砂の中や雪の中や水の中で遊び、石で家を建てるのも……常に、流れる水や渦を巻く砂や、あるいは美しい形にまとまった雪が

そうするようにさし招くからであって……これらのモノは全くパトスのな方言を語って遊びを誘発するのである。」

子どもは、母親と愛情関係を結ぶなかで、母親に対するコントロール感を修得して行くのに対して、モノは決して自ら動じることがないので、子どもの方が、その思い方を変えてゆかねばならないこと。しかし、その結果として得られる、モノに対するコントロール感は、自分の思い方に対する強い信頼を与えること。以上のことについて私は述べてきた訳である。

ここで、本節の最初に提起された問題、すなわち子どもにとつて、保育の場においては、当初、(母親に代表されるような)人間に対して持つコントロール感よりも、モノに対して持つコントロール感の方が、優先するのはなぜなのか、という問題について考察したい。

理由として、第一に、モノはどこにあっても同じ性質を示すが、人間は一人ひとり、異なっているということがあげられる。水は、家庭で遊ぶ時も、また保育の場で

遊ぶ時も同じ水であるが、母親と教師は全く異なった存在である。第二に、モノはモノの方から迫っては来ないが、人間はそうではない。第三に、子どもは、モノに比べて人間にコントロールされることに慣れていないのである。

コントロール感に対する人間とモノとの差異については、以上の点が考えられるであろうが、人間の中でも、相手が教師と友達とでは、大きな違いがある。子どもは



子どもどうし、すぐに仲よくなるものと大人は簡単に考えがちであるが、実際は、自己主張がぶつかりやすく、お互いに相手をまだよく見ることの出来ない子ども(友達)こそが、ある意味において、子どもから見て、コントロール感の持ちにくい相手であるのかもしれない。

しかし、子どもにとって、友達こそ、他の何にも増して素晴らしい一生の宝となり得ることもまた事実である。この事実を考えた時「美酒ほど造るのに長い年月がかかる」という言葉を、私は思い出さずにはいられない。

(3) モノに対するコントロール

(A) Bの水遊びをめぐって

〈事例 3-1〉

Bは、教師の働きかけで外に出る。大多数の男児は砂場に入る。雨の続いた後で、砂はしっとりと濡れている。Bはしばらく滑り台を二、三人の男児とした後、降りて来て

砂場のへりに座る。そこには、雨水の小さな水たまりが出来ていた。Bは一本指で水路を造ると、水はその路を伝って流れ出し、新しい水たまりを造る。しばらくそれを見た後、横にあった小さなコップを手に取ると、Bは水のみ場まで水を汲みに行つて、その水たまりに水を流す。それを何回か繰り返す。新しく出来た水たまりは、水の量が少ないせいもあって、すぐに水がなくなってしまう。私はその遊びに引き込まれ、もっとそこに水がたまると良いと感じる。そこで、私の横から離れられずにいたGを誘って、二人でじょうろで水を汲んで来る。Bにどこに水を入れたらよいかたずねると、すぐに元の水たまりに入れるように言う。そこでGと二人で水を流すと、水たまりの水は急に増え、Bが造った水路以外の所からあふれ出す。Bは、ワッと興奮して大声を出す。そしてもっと汲んで来るように言う。Gと何度も汲みに行く。水は最初の水たまりをあふれて、どんどん広がって行く。新しく水路を造って水を導いたり、ダムを造り、水を止めようとしたり、Bは水を意志どおりにコントロールしようとしている。そして、自

分も水汲みを始め、水が地面に染み込んでしまわないように懸命である。水の量が増すに従って、その水が造り出す池も広くなって来る。Bはその池を大切にして、誰が入ることも、またぐ事さえ許さない。水汲みを手伝ったGも、やはり入る事を許されない。そして、池の中に一人入って、三十分近く遊んでいた。

(Y保育園)

水は、多くの子どもを引きつける魅力ある素材の一つである。子どもにとって水とは、自分の思いのままになる一面と、逆にどうにも思いのままにならない一面とを持つた物質なのではないだろうか。すなわち、水はどのような形の器にも納まり、小さな穴も通り抜け、飲み物としては、嚙む必要もなく自分の体内に納まり、自分の一部となる。そもそも子どもは胎内で、水に包まれて生きていたのだ。しかし半面、水には法則があり、それを子どもはいかにすることもできない。水を低い方から高い方に流す事はできないし、溢れる水を押さえつけることも又できない。衣服にこぼしたコップの水も、こぼし

たせんべいのように、手ではらう訳にはいかない。子どもは水が去ってくれるのを待つのみである。さらに、水は子どもを溺れさせる。

Bは、初め一本指で水路を造った。おそらくそうすることで、水がそこに流れて来ることを予想したのだと思う。すると予想どおりに水は流れ出し、新しい水たまりを造る。Bはそこに自分の意志が反映されたのを見て満足し、かつ面白く思う。Bには、もう一度、水を自分に従わせてみようという気持ちと共に、カラになってしまった元の水たまりが、気になる気持ちがあわき起こったのだろう。Bはコップで水を汲みに行く、そして池に水を流し込み、水をため、また下に流す。

私も、このBの遊びに動かされ、水をもっとそこに入れたくなる。Gを水汲みに誘ったのは、二歳のGがBの手伝いをする(Bの喜ぶことをする)事で、Bと共に遊べるようになればと、私が考えたからである。じょうろ二つ分の水は、明らかに、そこに出来ている池に対しては多すぎる水の量である。Bは、おそらくそれだけの

水の量が、今までのコップの水とは比較にならない程の力を持っていることを感じていたと思う。しかし、どんな形で、どんな方向に、どんな勢いで溢れるかは分からない。水をザーッとこぼし始めると、勢いよく流れ出す水の力強さに、BとGは生命力を見たのだろうか、歓声をあげて興奮する。そして新しい水路を造ったり、または、池のふちを強めたりして、量の増加と共に格段に強くなった水をコントロールしようとBは懸命である。

水の勢いに生命力をみるのは、子どもによく見られる事である。公園の水飲み場を噴水にして歓声をあげる子ども。水道の蛇口を一杯に開き、そこに指を押し当て、辺りに勢いよく水を飛ばしつつ、勢いのある水だけが持つ、あのつるつるした感触を指先で楽しんでいる子ども。私たちはよく身边でこのような子どもたちを目にする。

池がカラにならないように何度も何度も水を注がれた池は、どんどんその領域を広げて行く。池が広くなって行くにしたがって、入れる水の量も増やさなければ、水

はすぐに干上がってしまう。池がカラになることは、Bにとっては、自分の心も空になってしまうことでもあるのだろうか、またBが水に負けた……水をコントロールし得なかった……証となるのだろうか。

Bは、自分でもじょうろを取ると、減っていく水に負けないように懸命に水を汲み、池に流し始める。Bにとって、生命力ある水を支配しようとすることは、とりもなおさず、自分でもコントロールできないB自身の世界をコントロールしようとするともできなかったのか。出来て行く水たまりは、Bにとっては、自分が水と戦った印であり、結果として出来た自分の作品でもあろう。

その意味で、この水たまりは、Bの内的な世界を現しているとも言えると思う。下に広がって行く水たまりを、ホッとしたような気持ちで振り返って見るBの顔には、満足の表情が見て取れる。Bは池の広がりの中に、自分の世界の広がりを見ていたのではないだろうか。Bがこの水たまりに誰をも入れなかったのも、こうして考えると、うなずけることである。一人で悪戦苦闘してい

る、こんなBの水遊びを見ていると、Bが友達と共に、心から水遊びを楽しみ合えるようになるまでには、まだ少し時間がかかることと思う。

Bが選び取ったこの遊びを、Bの園生活全体の中で捉え直してみると、この遊びに対するBの思いが、より鮮明になってくるのではないだろうか。

Bは教師の設定した保育にはほとんど乗らない。昼寝もいやがり、食べ残しや、後片付けを注意されても全く従わない。これらは全て家庭では出来ている事であって、教師の言う事が理解出来ないBではないのである。Bは、教師の誘いかけを出来るかぎり無視すること、すなわち、自分の心の耳を閉じることによって、やっと自らを守っているのである。そのようなBであるから、Bの方から教師に何かをたのむ事も出来ない。大便はもちろんのこと、小便さえ行かなくて、ブルブルふるえている。友達に対しても、その子が使っている積み木に心を動かされても、貸してとたのめない。それでい

て、自分が手にしたオモチャは、絶対に友達に貸せないのだ。貸してもらえないか、貸して上げられないかという二つの答えしか、その時のBにはないのだ。なんと不自由なBだろう。Bは教師に対しても、また友達に対しても、どうしたら自分がコントロール感を持つのか全く分からないのだ。そして、ただ相手にコントロールされないように自分を守っている。

このような状態のBが、自分からかわれた対象がモノであったのは当然と言えば当然であったであろう。Bは自分の喪失しそうになっているコントロール感を、モノに向かうなかで取り戻そうと努めていたのだと思う。

(B) コマ遊びをめぐる

〈事例3-2〉

正月明けに保育園に行くと、二歳から六歳まで、子どもはコマまわしに夢中である。四歳からは、ヒモでまわすコマに挑戦している。まだ上手に回せない子どもも、繰り返し繰り返し、一人で練習している。コマにうまくヒモをか

けられない子どもも多い。苦勞してヒモを巻く、投げ出すその一瞬にかけて、苦心して巻いたのだ、もったいなくて、なかなかコマを投げられない。決心したようにサッと投げる。うまくヒモの巻けないコマは、たいていうまくは回らない。失敗だ！ 子どもは、イスの下にもぐりこんだコマを助け出すと、また初めからやりなおしている。うまく回せる子どもは、得意気である。傘まわしなどして楽しんでる。うまく回っているコマに対する子どもの扱いは興味深い。他の子がそのコマを止めてしまうと、まず全ての子どもは怒る。それでいて、自分のコマは止まる前に自分で止めてしまうことが多い。友達とぶつけ合いをして遊んでいる子どももいる。Aは、コマの色付けに凝っていて、模様を描いては回してみても、また書き足すという作業を繰り返している。そして、上塗りに上塗りを重ねて、コマへの愛着を深めている。

(Y保育園)

コマは不思議なモノである。止まっている時はけっして立たないのに、回っている間は、逆にけっして倒れない。

い。そして力がなくなってくると、フラフラになり、ついにはまた倒れてしまう。子どもは、回っているコマに生命を感じるのであろう。勢いよく回っているコマは力強い感じを与える。そして、そのコマに命を与えたのは(回したのは)自分だという自負が、なんともいえず子どもには心地よい。他人からさせられるのではなく、自らの遊びの内に熱心にコマまわしの練習を繰り返すのは、自分が、このコマに命を与える主体になりたいからにはかならない。自分で回したコマは自分が生かしたモノであるから、他人がそれに干渉することは許されない。回っているコマを友達に触れると子どもが怒るのは、ごく自然な心の動きであろう。そして、回っているコマを、時に自分で止め、自分がコマの主人であることを確認する。(もちろん、コマを投げる瞬間が大切で、回ってしまったコマには興味がないので、途中で止めてしまうということもあるには違いないが、その場合でもやはり、自分で止めることに、「ある思い」は存在すると思う。)また時には、勢いを失ってフラフラになって

いるコマを、倒れる前に自分で止めてしまうこともある。子どもは自分のコマが死ぬところ（止まるところ）を見たくないであろうか。いずれにしても、子どもは自分の意志でコマをコントロールして楽しむ。回す技術さえ身に付ければ、コマは、常に子どもに従う存在である。コマに描いた模様でも、意外性が潜んでいる。止まっている時と回っている時とは、その様を全く変えてしまう面白さがそこにはある。中には、同心円を描いた時のように、回しても全く変化を見せない描き方もある。子どもは、どう思っただけ描けば、どのような変化を見せるのか、繰り返し繰り返し、試している。そして上塗りが進むにつれて、そのコマにたいする愛着は深まり、いよいよ自分の分身となってくる。

エリクソン（一九五一）はその著書の中で、フロイトが記録した有名な事例について引用し、玩具と遊びの持つ効用について語っている。

その事例とは、母に常に置いて行かれてばかりいた男児が、ひもの付いた糸巻をベッドの下に投げ捨て、また

ひもをたぐり寄せ、出現させる遊びの中で、自分の母に対する受動的立場を、能動的立場に変えたというものである。そして、子どもの発明したこの遊びが、単に孤独な遊びとして終わったのではなく、実際の母親との関係をよりよいものにした、とエリクソンは説明し、遊びの持つ力を評価している。

モノとの遊びの中で、子どもは常に王様である。子どもはモノをコントロールすることで、自分の確かさを確認する。そして、その自己有感情こそが、現実の生活の中において、未知の世界に対して自己を船出させる時のエネルギーとなるのである。（お茶の水女子大学付属幼稚園）

— 参考文献 —

(1) Erikson, E. H., 1950 "Childhood and Society",

W. W. Norton, N. Y.

(仁科弥生訳一九七七 幼児期と社会Ⅰ みすず書房)

(仁科弥生訳一九八〇 幼児期と社会Ⅱ みすず書房)

(2)ランゲフェルド 一九五六 子どもの人間学研究

マックス・ニーマイヤー書店 テュービンゲン

(実吉春夫訳一九七五 子どもの世界の中のモノ 月刊)

誌「幼児の教育」フレイベル館 一九七五年二月号)

(3)佐伯 胖 一九八二 イメージ化による知識と学習

東洋館出版社

言語障害の臨床研究ノート(5)

共有する

村上 敏子

「テレビ番組セサミストリートによって気づかされたこと」と

最近、関心を持って見ているテレビ番組がある。「セサミストリート」である。一九八八年の製作とあるから、アメリカでは、二年も前に放映されたのであろうが、感覚を二年前に巻き戻さなくても、異和感なしに見

れる。それどころか、人間のありよう、教育のありようを先取りしており、心が和むことが多い。

私の最初の職場に、アメリカの大学の修士課程で、言語病理学を学んで来られたK先生がおられた。そのK先生が、「セサミストリートは、学校教育を満足に受けられないスラムに住む子ども達のために製作された番組で